



Title	伊井直行論 [全文の要約]
Author(s)	川崎, 俊
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13712号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76333
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Shun_Kawasaki_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：川崎俊

学位論文題名

伊井直行論

3部8章から成る本論文では、日本の小説家・伊井直行（1953～）の作品、とりわけ、「会社員」と小説との関係を問題化したものをテキスト分析し、その特徴と意義とを析出した。

伊井は、「会社員」と小説との関係をめぐる創作活動を、1980年代末から断続的に行ってきた。その仕事は主に、2010年代以降に発表された評論、『岩崎彌太郎——「会社」の創造』（2010）や、『会社員とは何者か？会社員小説をめぐって』（2012、以下『会社員小説をめぐって』）でまとめられている。伊井による一連の「会社員小説」論は、近代社会に登場した「会社」や「会社員」が、同時期に誕生した筈の「近代小説」で不可視化されてきたという前提に立ち、近代社会と「近代小説」とのギャップを突いている。よって、近代以降の社会と文学に関わる根本的な問いを提起していると考えられる。

しかし、伊井自身による差別化にも拘わらず、「会社員小説」論を評した文章は悉く、「会社員（小説）」と「サラリーマン（小説）」とを混同している。また、「会社員小説」論の把握には、「会社員」に関する伊井の小説と併せた考察も不可欠だが、伊井の小説作品の分析自体、今日まで手つかずのままである。

本論文では、まず、伊井の「会社員」概念が、単に被雇用者を意味するのではなく、近代人の代表的な在り方を意味していることを踏まえる。次に、伊井の創作活動が、グローバル資本主義下で、小説のリアリズム、および「人間」概念の変容が顕著になった状況から出発したことに着目する。以上の二点を押さえて、「人間」概念の解体および再構成の延長線上に、「会社員」と小説の関係をめぐる活動を位置づけ、このパースペティヴから伊井の創作活動を整理した上で作品分析を行った。

序章では、これらの前提を示しつつ、「リアル」と「細部」の二つの語を手がかりに、伊井の小説観を、現実とのせめぎ合いから記述の自律性が生じる点を重視したものと特徴付けた。そして、この小説観が、「会社員」と小説との関係をめぐる創作活動の問題意識と繋がることを指摘している。

第1部では、小説と「人間」、それぞれの概念の再編成が、伊井の作品群を貫く問題系として取り出される。その問題意識は、伊井のデビュー作・「草のかんむり」（1983）からすでに認められる。第1章では、同時期の村上春樹の活動とラテンアメリカ文学ブームとを導きの糸として、「草のかんむり」を詳細にテキスト分析した。グリム童話の「蛙の王子」等を換骨奪胎したこの小説では、物語の虚構性をめぐる小説の体裁を取りつつ、フィクション／ノンフィクション、人間／非人間、イメージ／言語等の境界が複雑化される様相が示される。これらの特徴は、書くことそれ自体を題材とする小説がもはや成立しないことを示す、〈記述＝撮影〉の論理へと集約される。

第2章では、第1章の内容を踏まえ、伊井の作品群における「草のかんむり」の特徴の反復を確認する。とりわけ、小説それ自体の条件を探るメタフィクション的問題の再導入、および人間／非人間の境界の複雑化を、1993年に発表された「ジャンナ」と『進化の時計』という二つの小説に認める。ただし、これらの小説は、「会社員」をめぐる小説執筆の試みを経た後、その問いからは意図的に離れたものとして発表されている。そうすると、「会社」や「会社員」は、人間／非人間の分割について、これらの小説に認められた問題とは異なるものを内包した存在として位置づけられていると考えられる。

その内実を明らかにするべく、第2部では、平成期初頭（1989～1991）における、「会社員」と小説との関係をめぐる伊井の創作活動を追った。とりわけ、後年伊井が「会社員小説」として言及した、「さして重要でない一日」（1989）、および「星の見えない夜」（1991）の二つの小説の分析が、その中心となる。

第3章では、「会社員」の問題を本格的に扱った最初の作品、「さして重要でない一日」を分析した。この小説では、「彼」という呼称の機能とそれに即して構成された文体により、死やアクシデントの可能性を抑圧した領域としての「会社」に従属する「会社員」の主体性が示されている。しかし、「さして重要でない一日」でアクシデントの可能性とされるものは、後年の「会社員小説」論では、それ自身が「会社員」として捉えられているため、最終的にはその微妙な差異に着目する必要があることを指摘した。

第4章では、「さして重要でない一日」と「星の見えない夜」とのあいだの時期に発表された小説・「雷山からの下山」を分析し、そこで新たな叙述方法が模索されていたことを明らかにした。「雷山からの下山」では、前章までで取り上げた小説と異なる方法がとられる。この小説は、物語内容と文体において一種の平板さを打ち出すことで、結果として資本制社会における複雑な歪みを浮上させている。この「平板」さは、後続の「星の見えない夜」で、「会社」と「会社員」との不可分の関係を提示するべく流用される。

第5章では、「星の見えない夜」を分析した。まず、この小説と同時期に書かれた、後年の「会社員小説」論の基となる一連の文章に注目する。そこから、伊井の「会社」と「会社員」概念が、国家と個人との関係とは異なる主体化の軸を意味することを読み取った。これは、第二次世界大戦以降、平均的な日本人を意味する用語として人口に膾炙した「サラリーマン」の言説編成とは特徴を全く異にする。そして「星の見えない夜」では、「会社員」の記述が「会社」の業務に関する記述と不可分になることに突き当たっており、そこから、「会社」それ自体が近代的「人間」である、という認識を示すに至っている。さらに、「星の見えない夜」と同時期に、一見近接する平板な表現を導入していた中上健次の試みと切り結ぶことで、「星の見えない夜」は、近代社会と「近代小説」との隔たりを示す。近代以降の個人の主体性や特定の土地との結びつきを解体する目論見があった中上に対し、伊井の場合、それらを前提とすることなく近代的「人間」としての「会社」を記述した結果、上記のような記述になっている。このように、伊井の小説における「会社」や「会社員」は、不可視のうちに人間／非人間の分割を行うものとされる。第2部で論じた伊井の

試みは、それを示すことで「近代小説」のリミットを刻んでいる。

第3部では、21世紀に入って再び表面化した、伊井の「会社員小説」(論)に関する活動を扱う。第2部で提出された「会社＝人間」の図式を踏まえつつ、いかに「会社員」を個人として捉え返すかを試みたものとして、伊井の小説と評論を分析した。

第6章では、裸で屋外を歩くことを趣味とする男性会社員が木に変身する小説の二つのヴァージョン・「ヌード・マン・ウォーキング」(2006)と「ヌード・マン」(同)とを比較検討した。これらは、後続の「会社員小説」論を考える際の重要な手がかりとなる。特に、二つのヴァージョンにおけるヌード・ウォークと木への変身に注目した。これを、資本制と監視制度が結託していく1990年代以降の日本社会において、父親と「会社員」であることから抜け出て、新たな共同性を探るための二通りの試みとして分析した。この二通りの試みは、「会社」の問題に踏み止まりつつ個人主義を考える、という、後続の「会社員小説」(論)の展開へ向けたバネになっている。

第7章では、『会社員小説をめぐる』における「会社員」概念の特徴を確認した。岩崎彌太郎に関連する資料から読み取られた「公私の分断」の概念を、「会社員」の特徴として導入することで、「会社員小説」のサブジャンルの規定が可能となったことを指摘した。そして、『会社員小説をめぐる』では、「公私の分断」された「会社員」の分裂性から、小説における公共性や「人間」の記述可能性を押し広げようとする。つまり、この評論では、平成期初頭の小説や小論からの態度変更が明確に打ち出されている。

第8章では、『会社員小説をめぐる』の後に発表された長篇小説・「尻尾と心臓」(2016)を分析し、そこに「会社員小説」論の継承と更新を読み取った。この小説は、「さして重要でない一日」や「星の见えない夜」と異なり、女性の「会社員」が主要人物の一人となる。ここからも判るように、「尻尾と心臓」は、「会社員」概念とポリティカル・コレクトネス(政治的妥当性)との関係を踏まえて書かれている。その上で、民主主義と自由主義との齟齬を糊塗するポリティカル・コレクトネスとは異なる形で、「会社員」を個人として捉え直そうとする新たな個人主義が模索されていることを、複数の共同性を横断しつつ自己を規定する「会社員」の記述に着目して明らかにした。

終章では、各章のまとめ直しを通じて、伊井の「会社員」に関する創作活動が、明治期以降、あるいは第二次世界大戦以降等の区切りで、「近代小説」や「人間」についての認識がどのように変わったか(あるいは変わらなかったか)を再検討する必要性を生じさせていると結論づけた。また、近代的「人間」が「会社」(あるいは「会社員」)である以上は、「近代小説」などそもそもどこにも無かったのではないか、という極めてシニカルな認識も読み取れる。このように、伊井の創作活動に注目することで、小説についての従来の見取り図が変わる。本論文はそれを明らかにした。

末尾に、伊井の文章と関連資料のアーカイブを附した。